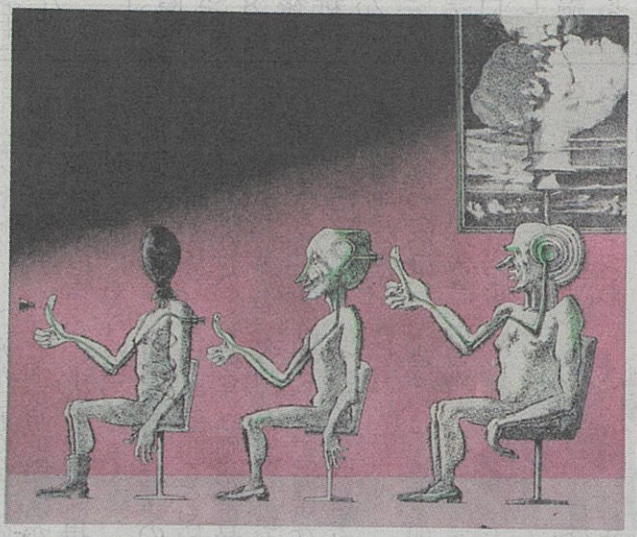


「ボタンA」
1988年、エッチング、アクアチント、手彩色・アルシュ紙
36・0㌢×43・0㌢

浜田知明（1917～2018年）

《名画の扉》 大川美術館コレクション展から

浜田知明は、戦争中の過酷な兵役体験をもとに、戦後「初年兵哀歌」のシリーズで、一躍国内外から高い評価を受けた銅版画家でした。その後も、郷里である熊本県に住み、一貫して社会への批判的な視点で、シニカルでユーモアを交えた作品を発表していました。

この作品も、冷戦下の世界で、大国の指導者がひとつのボタンを押すことで、世界が破滅することを表現しました。

これが20世紀の世界だとすると、21世紀になった今日は、どのような状況でしょうか。各地で紛争、戦争が起こり、戦禍がやむことがありません。しかも大国の専横が、いっそうひどくなっていることを思えば、この「ボタン」の危機は続いているといえるでしょう。

もしこの作者が生きていたら、今の世界をどのように表現したでしょうか。

（田中）